

平成 21 年 8 月 30 日
インド・アジア開発

WHO PARTITIONED INDIA ?

パキスタンの独立記念日は 8 月 14 日、インドの独立記念日は 1 日遅れの 8 月 15 日である。

両国が 1947 年に独立するまでには、独立運動の長い経緯があり又悲惨な悲劇が隠れている。

時あたかも BJP の長老下院議員で元外相の Jaswant Singh が 8 月 17 日に「Jinnah : India - Partition - Independence」なる著書を上梓し、BJP が 8 月 19 日に Jaswant の党籍剥奪処分をした。インド人にとって印パ分離は、回顧したくない神話的事実の面があるようである。

これが契機になったのであろうが、India Today 8 月 31 日号は、下記の見出しで歴史学者 5 名の論文を掲載している。Who's to Blame? Was it Jinnah or Nehru or Patel? Eminent historians give the answers to the question that haunts India

Manmohan Singh 首相は現パキスタン生まれ、Pakistan の Musharraf 前大統領の生家はデリーにある。インドの北西部、パキスタンのシンド・パンジャブ州、の住民には親戚知人が今も彼の国に住んでいるという人も少なくないし、ボンベイにはカラチ大学卒のインド人も多かった。印パ分離後 1970 年代まで両国交流は途絶しており、斯様な人達から彼の国の親戚知人への書簡を第三国で投函してくれとしばしば頼まれたことを思い出す。

歴史学者の論点要旨は後ほど紹介するとして、印パ分離の過程を振り返ってみると、好悪相半ばするものの骨肉の争いの激しさが判る。

1885 年 国民会議派がボンベイで結成される

国民会議派は不偏不党、全住民・領域を結合した独立を望んだが、ヒンズー主義を唱えるグループが会議派内に出現。その反射としてムスリム連盟が 1905 年結成され、1930 年代にはムスリム大衆を把握し、ムスリム多住地域の分離独立を出張。国民会議派は分離独立で妥協して対英政治運動団結を維持。

1919 年 インド治安維持法成立 — Gandhi の非暴力・不服従運動

1941 年 第 2 次世界大戦勃発

インドは対英協力したが、チャンドラ・ボースは方針の違いから国民会議派と訣別し対日協力を踏み切る。

1945 年 大戦終結

Gandhi は分離を悲しみ、政治から離脱してカルカッタのムスリム街に住み、ヒ

ンズー・ムスリム宥和に努める。

1946年 カルカッタでヒンズー・ムスリム両教徒大衝突

1947年8月 印パ独立

独立前に、インドのムスリムの過半が、北西部のムスリム達は西パキスタン向けに、東部のムスリム達は東パキスタンに、西パキスタンのヒンディーとシク教徒はインド向けに、流浪民として移動した。東インドではさほどの問題はなかったが、西側では飢えた流民が沿道の田畑を荒らしたので地元農民の襲撃を受けたこと、東西に流れる流民同士の乱闘などで、約百万人の流民が死亡するという悲劇を招いた（邦訳書名は忘れたが、仏・英作家が共著でこの悲劇を叙述している）。

Gujarat 州ではラジコット藩王国などムスリム藩主の王国が2-3あったが、住民の過半を占めるヒンズー教徒の意向を容れてインドに帰属。デカン高原ムスリムのハイデラバッド王国は独立を志向したがインド政府の武力威嚇でインドに帰属。

カシミール藩王国は住民の過半がムスリムだったが、ヒンズー教徒の藩王が帰属決定に逡巡、パキスタンからの民兵侵入で生命の危険に瀕してインド政府の救助を仰ぎインド帰属を決めたことが第1次印パ戦争に発展した（1947.10-1948.12）。

1948. 1. 30 ガンディー ヒンズー狂信徒に暗殺される

1965-66 第2次印パ戦争

1971 第3次印パ戦争（東パキスタンが Bangladesh として独立）

1999.5 パキスタン軍インド領カシミール Kargil 地区に侵入

2002.3 カシミールを巡り印パ軍対峙、触発の危機

歴史家5名の論旨をご紹介します。先ず歴史家は：

1. Sunil Khilnani – The author of The Idea of India
2. Ayesha Jalal – Cambridge 大卒、パキスタン系米国人, Tufts University 教授, USA
3. MGS Narayanan – former Chairman of the Indian Council for Historical Research
4. Yuvraj Krishan – retired bureaucrat and author of Understanding Partition
5. Mark Tully – author and broadcaster

Sunil Khilnani

不信と絶望、つまり、気難しく見栄っ張りの、Nehru と Jinnah の冷え切った関係がインド亜大陸の歴史を変えた。Jinnah は対会議派及び対英国交渉での戦術的ブラフとしてパキスタンを口にしていたのであり、地方分権的な政治秩序を獲得する為

の脅しであった。彼は清浄 (purity) ではなく平等 (parity) を、格付け (identity) ではなく同格 (equality) を求め、
パキスタンは斯かる政治形態の自治体として樹立された。
Nehru は、多くのムスリムが感じ且つ Jinnah が声にしていた恐れ、民主制の下で
少数派が感じる恐れを十分に掴みきれてなかった。

Ayesha Jalal

分離寸前まで斯様な悲劇をインドムスリム代表は避けようとしたが、Nehru と
Patel は分離に拘泥した。Jinnah の歴史的誤表出が慢性病的な均衡状態を作り出し
たと言えよう、と言うのも、対抗的なナショナリズムの犯すべからざるイデオロム
に政教分離のインドとイスラム・パキスタンがそれぞれ深く結び付く結果になって
いるからである。

MGS Narayanan

Nehru はインド国家と世界に対する貢献ゆえに罪なしとされようが、分離の責任な
しにはならないだろう。Jinnah は固陋なムスリムではなかったが、Jawaharlal
Nehru に対する嫉妬が自殺的なコースに彼を追いやり、彼は死の直前にその事を悔
いたようである。

Gandhi だけが分離後の諸問題を予測して分離回避に最善を尽くし、西ベンガルの
片田舎で断食をした。

Yuvraj Krishan

Jinnah は Nehru と Gandhi の間に亀裂を入れるのに成功した。Abul Kalam Azad
や Mehmood Husain Madni などの愛国的ムスリム指導者は、分離は地域に回教原
理の支配を招来するパキスタン樹立に反対した。

Mark Tully

1 人の愚行ではない。インドもパキスタンも両国指導者達が過ちを犯したことを認
めなければならない。会議派は Jinnah 賞賛は Nehru 貶損と看做し、会議派・BJP
両党とも Jinnah が政教分離主義パキスタンを主導したことを承認拒否してるが、
印パ両国関係好転を損なうものでしかない。

5 歴史家の論を見ても、印パ分離は誰の過失かと言うことは判然としない。

以 上